
EARTH FANTASY ONLINE

龍耀 珠夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EARTH FANTASY ONLINE

【Nコード】

N8599C

【作者名】

龍耀 珠夜

【あらすじ】

ただの時間潰し：興味本位で始めたはずのオンラインゲーム。『EARTH FANTASY ONLINE』。オンラインゲームの危険と、オンラインゲームの大切さを同時に体験する佐伯癒那さへおゆな。時間を共有するうちに近づく距離。そして現実。終わる事の無いゲームで癒那が出した結論とは…。オンラインゲームの良い面、悪い面を体験して、癒那は少し成長する。大切なものを手にして。

STAGE 0: プロローグ (前書き)

本編中、戦闘シーンなど多少、暴力表現等がございます。

ゲームの中での話ですので、『死ぬ』や『殺す』等の表現もございます。ご了承ください。

私も以前オンラインゲームにはまっていました。

オンラインゲームの良い所、悪い所、等を素直に書けたらと思います。

オンラインゲームプレー中の方には多少不快な部分があるかもしれません。ご了承ください。

STAGE 0..プロローグ

きっかけは、友人からの誘いだった。

最近よくニュースで流れるネット犯罪。ネットでの出会いの恐さ。顔が見えない事による、相手の真意の不確かさ。

『あれは正当なコミュニケーションではありませんね』
ブラウン管の中で意気揚々と語るコメンテーター。

『長時間のプレーは脳に障害をもたらし、次第に現実とゲームの境があやふやになってしまいます』
どこかの大学教授様。

危険性や恐さを熟知していたはずの、佐伯 癒那さへ ぐながはまってしまったもの……………。

『オンラインゲーム』

その名は……

『EARTH FANTASY ONLINE』

STAGE 0: プロローグ (後書き)

次回をお楽しみに！

STAGE 1：誘いと決意（前書き）

ネットゲームプレイ中の方には、多少不快な表現がございます。
ご了承ください。

STAGE 1…誘いと決意

時刻は午後五時を回った。

喫茶店『ユーラシア』ではバイトメンバー交代の時間。

『お疲れ様でしたあ』

二人の女性が少し狭い事務所へ、帰り支度のために戻って来た。

「結構楽しいから、癒那もやってみなっ！最初は私が助けるし、私の仲間もいるからさ！」

満面の笑みで迫るショートカットの女性。

まつえさりな
松江沙莉奈。

「ネットゲームとか…なんか危ないじゃん。しかもオタクばっかじゃない？そんなの嫌だよ」

沙莉奈とは逆に、露骨に嫌そうな表情を見せながら、ジーンズに白いティーシャツに着替えていく佐伯癒那。さへきゆな

「確かにいるけど…普通にカッコイイ人いるよ？カワイイ子も」

「ネットゲームに恋人なんぞ求めるな！」

身を乗り出す沙莉奈のおでこを軽く小突く。

「ゲームはゲーム。出会い系は出会い系。両方一緒とか…。絶対勘違い野郎が男女共にいるし…ネットでしか恋愛した事ないとかいるよ？普通に出来ない人…沙莉奈…気をつけなよ…。絶対人付き合いおかしいからそいつら…少なくとも正常じゃない！うちらもう二十

三だよ？」

バイトの先輩でありながら、同じ二十三歳同士で仲良くなった沙莉奈。癒那にとっては大切な友達。

出来ることなら辞めさせたい。ネットゲームの話している時の沙莉奈は楽しそうだけど、ありえないもう一つの世界を生々しく語る…。世界は：一つなのに、もう一つしっかりあるらしい。

「大丈夫！私の彼氏もやってるし！ってか前のバイト先の人で、私も彼氏に誘われてはじめたし。：いつの間にかはまったけど」

（ありえない…）

癒那は肩を落とした。

先日みたばかりだ、どこかの恋愛相談サイトで、『ネットゲームでヤキモチばかりで、彼と話す時間もない。あってもゲームの話しばっかりなんです』

沙莉奈がこのカップルと同じ道を進む気がしてならない。

「ね？今なら一週間お試し期間だから！暇つぶしがてらさ」

引かない沙莉奈。珍しい事だったから：癒那は断りそびれてしまった。

満面の笑みを前にしたら：癒那はそもそも断れない性格だ。

それに興味があった。

沙莉奈をこうまでも引きずり込むネットゲーム。

怪訝されながらも人口を増やすネットゲーム中毒者。

『おかしい』と言われる世界。

現実を見失う世界。

「じゃあ家に帰ってダウンロード出来たら電話してね」

店を出た沙莉奈は嬉しそうだった。

「バイバイ」と手を振りながら別れた。

その後ろ姿を見送ってから癒那は歩き出した。

(どうしよ…悠斗にメールしとこ)

さわだゆうと

澤田悠斗。癒那の十個年上の愛する彼氏だ。

沙莉奈からの誘いと、やるって答え。

何と無く…気が重かった。

癒那は家に帰るなりコンピューターに電源を入れた。
そのまま少し待ってネットを立ち上げた。

『EARTH FANTASY ONLINE』

検索欄に打ち込むと一番上に公式サイトが出た。

『初めての方』

クリック。

まずは登録。名前や希望のIDやパスワードや連絡先を入力していく。

登録は二分くらいで終わった。

『ゲームダウンロード開始』

一瞬ためらった。

そのままクリックする。

保存先を指定して：しばらく放置。20分ほど。

癒那は先にお風呂に入る事にした。沙莉奈からもらった攻略本を片手に。

お風呂場で使い方やキャラクターなど一通り覚えるつもりだ。携帯が机の上で震えた。

『好きにしな。信じてるから』

悠斗からだった。

浮気するとおもったかな？なんて思いつつ、認めてくれた喜びに胸が弾む。

着実に進むダウンロードバーを見ながら、癒那は部屋を後にした。

STAGE 2..誕生!! (前書き)

オンラインゲーム体験者の方には、少し不快な表現があるかもしれません。ご了承ください。

STAGE 2…誕生!!

癒那はお風呂から上がり髪を乾かしてから二階の自室に戻った。

『ダウンロードが終了しました』

その文字に、胸が一拍強く打った。

（なんで緊張してるんだろ）

自問自答しながらコンピューターの前についた。
ダウンロードしたゲームを立ち上げると画面いっぱいが水色になった。

『EARTH FANTASY ONLINE』
の文字が一文字づつ、左から表示されていく。
始まりに相應しい行進曲のようなオープニング。

文字が消えるとIDとパスワードを入力する画面が中央にでてきた。

入力を済ませると『ログイン』のボタンを押した。

『キャラクター作成します』そこでまずはキャラクターに付ける名前を入力する。

「名前：カッコイイのいいなあ…刹那…」

『確定』

「うわっ…」

名前の重複。

何千人、何万人がプレイするこの世界では、穴をぬう方が大変かもしれない。

癒那は若干イライラしながら何度も名前を入力した。

何回目か数えるのを辞めたとき…やっと名前が決まった。

「滝夜…か…男みたいだな」

最後は投げやりに入れた名前が承認された。

そのまま性別を選ぶ。癒那は当然女を選んだ。

次に自分の使うキャラクターの職業を選ぶ。

画面に並ぶキャラクター。それぞれが自分の職業にあった装備をつけ、ポーズをとったセピア色の写真たち。

治療能力・治療魔法に長けた白魔導師。

攻撃魔法に長けた黒魔導師。

接近戦に長けた剣士。

長距離戦に長けた弓使い。

回避能力に長けた怪盗。

大きく分けてこの五つから選ぶ。

「剣士しかないだろお」

癒那は迷う事なく選んだ。

女だけど超強い奴を作るつもりだ。

迷っているのは育成方法。

敵を倒して得た経験値から、自分で好きなスキルと呼ばれる攻撃手段や魔法が取れる。その取り方により、十人十色のキャラクターが出来上がるのだ。育成が簡単なスキル選から、難しいが強くなるスキル選。

奥が深い。癒那の第一印象だ。

次にキャラクターを作り出す画面に移った。

画面左に『顔』『髪』『体』とあり、それぞれのパーツ名が書いてある。押すと左下にそのパーツが細かく表示され、その中からプレイヤーが好きな物を選び自分だけのキャラクターを作り上げていく。顔や体の色、大きさや長さ、胸の大きさまで変えられた。

この時点で癒那に不思議な感覚が芽生えた。

【自分に似てる】

そのパーツを無意識に選び出していた。

画面右には、ゲームキャラクターとしての自分が出来上がっていく。

この分身製造機能が、プレイヤーを四つのパターンにわけ。

癒那のように、分身を作るプレイヤー。

理想の自分を作るプレイヤー。

可愛く、かっこよく、等の自分の慣性で作るプレイヤー。

ゲームが出来ればと適当に作るプレイヤー。

きつとこのキャラクター作成で：はまり方や、はまり度合い、自分のままで行くか、演じるか。等が決まってくるのかもしれない。はまると言うか『依存度』と言うべきか。

「ぐああ、出来たっ」

癒那は椅子に座ったまま伸びをした。

次は自分が所属する国を六つの中から選ぶのだが、これは沙莉奈に指定された『プレスト王国』を選択した。

画面が真っ白に変わり、ゆっくり中央から街の景色が浮かび上がる。

RPGに良くある町並み。

コンクリート作りの家に木材のドア。溢れる自然。

『プレスト王国 イン』

癒那が滝夜として初めてオンラインゲームに入った瞬間だった。

画面の中心にいるのが『滝夜』。

甲冑を身につけた剣士。見るからに…ゴツイ。くるぶし辺りまであるマント。左のウエストにはまる剣。

まるでアニメを見ているようだった。アニメの中のキャラクターを動かす感覚。

右上には街のマップ。

左上には丸が十二個並んでいる。スキルを決めて選ぶと、キーボードのF1からF12に対応して発動する仕様になっている。

「さて、後は沙莉奈に頼るか」 癒那は携帯を手にした。

「あっ…うん、キャラクター出来たよ。…ん…今ね…真ん中より左下の道路の上」

マップは中央から十字に延びた道とXに延びた道がある。

滝夜は今、Xの左下の方にいる。

「いたいた、キュアってキャラ？おゝ会えた会えた…」

画面で滝夜の隣にいるロリキャラの白魔導師。白魔導師なのに黒服ねロリータファッション。

それが沙莉奈のキャラ、『キュア』。

装備やアイテムは倒した敵から拾ったり、それを売ったお金で新たに買ったりする。

中には合成と言う方法で、装備やアイテムとお金を使って新たな物を作り出す事もできる。

そうしてどんどん自分好みにしていくのだ。

「チャット？…ああ出た出た！わかった…うん」

癒那は携帯を切った。

後はゲーム中のチャットで話ししようとの事。

『キュア』の頭の上に言葉が出てくる。

『ようこそ！滝夜！』

こうして癒那はオンラインゲームの世界に入った。

冒険にでるために…。

STAGE 3：簡単なレベル上げ（前書き）

オンラインゲームプレイヤーの方には多少不快な表現があるかもしれません。ご了承下さい。

STAGE 3…簡単なレベル上げ

【キュア…どう？わかった？】

キャラクターはカーソルをマウスで動かして、クリックした位置に動く。

スキルの発動はF1からF12を押してから、倒したい敵、回復したい仲間など発動場所をクリック。回復アイテムや装備も入れて使ったり変えたりできるそうだ。

宿屋、武器屋、防具屋、道具屋、転送屋などの一通りの位置。

会話は普通に入力すれば誰でも見れる黒の文になる。

相手の名前の後に◆を付けてから入力で、その相手にだけ見える緑の文に。

自分が所属したグループ名の後に★を付けてから入力で、そのグループにだけ見えるオレンジの文に。

一通り教わった。

【滝夜…一応なんとなくわかったと思う】

【キュア…したら、これあげる♪なんか出たらOK押して】

沙莉奈の言う通にすると、半分に別れたウィンドウがでた。その中に次々現れる武器や防具やアイテムにお金。

そしてまたOKを押す。

【トレード完了しました】

【キュア…自分のアイテム欄開いて、掴んで持ってくればアイテム

あげられるから】

【滝夜…アイテム欄？】

【キュア…左上の名前の下にアイコンあるよ】

癒那は言われた通り見てみると、アイテムの巾着袋アイコン、武器の剣アイコン、防具の盾アイコン、お金のコインアイコンと所持金。

「なるほど…ってかめんどいなあ…」

癒那はぼやきながらモニターを見つめる。それからもらった本をめくった。キャラクターの所しか見ていなかったが、一通りのやり方が書いてあることに気が付いた。

「あっ…」

【キュア…おい！】

ヒュンヒュン

無駄に回復魔法をかけて、音で癒那を引き戻そうとしているキュアの姿があった。

慌ててキーボードを叩いた。

【滝夜…ごめん】

【滝夜…もらった本に書いてあったね】

【キュア…あはは大丈夫V装備付け替えてね】

癒那は本を見てから、各アイコンを開いて、沙莉奈から譲り受けた装備品をダブルクリックしていった。

【キュア…少しレベル上げに行こうか！】

【滝夜…うん！】

【キュア…今からワープ出すから、出て来たら入ってね】

癒那は首を傾げながら待った。すると二人の間に白い光りの球が出て来た。それをクリックすると滝夜がその中に入っていた。

画面が真っ白になる。

これがフィールドが変わるときの定番らしい。せめてイラストだすとかすれば良いのにと癒那は思った。その瞬間新しいフィールドが現れた。

森の中。草木が茂る森。

【キュア…ここが第一かな。通称プクン森】

【滝夜…プクン森？】

「なんだそのダサイ名前…」

キュアが一瞬画面から消える。すぐに戻って来たが…

「なっ!？」

キュアのすぐ後ろを、真ん丸で目とくちばしを持つ…ヒヨコを真ん丸にしたような黄色のモンスターがついてきた。

【キュア…これが最初の敵のプクン！】

「敵！？かわいいなあ」

敵と言うよりペットだった。跳びはねて体当たりをする仕種が愛らしい。

キュアの上に【Miss】の文字。攻撃が当たっていないという意味だ。

回避率が相手より高ければ攻撃を避ける確率が高くなる。この場合はレベル差からくる回避率の差。キュアはすでにレベル85だ。

【キュア…私が敵を引き付けるから、どんどん倒して♪】

癒那はプクンにカーソルを当ててクリックした。滝夜が剣を抜きプクンを切り付けてまた鞘に戻した。

プクンの上に赤い数字が出た。【3】ダメージ…。

「…よわ…」

レベル1で敵が死ぬわけなく、癒那は十回もクリックさせられた。

【滝夜…これって何回もクリックしなきゃダメ？】

【キュア…シフトキー押してクリックすれば連続攻撃になるよ♪】

【キュア…あっせっかくだからアイテム拾った方が良いよ】

癒那は倒したプツクンから落ちたアイテムにカーソルを当てて回収する。

【キュア…速度増加】

ヒュン

【キュア…攻撃力増加】

ヒュン

【キュア…運氣上昇】

ヒュン

【キュア…これが支援魔法。他にもあるけど今はこれだけで大丈夫かな】

【キュア…多分全然違うと思うよ!】

滝夜は新しいプツクンを叩いた。今度は三発。

【滝夜…全然違うね】

【キュア…でっしょ♪】

それから二人は十分くらいでプツクン森を引き上げ、一人では到底行けないレベルのフィールドに場所を移した。

【キュア…私が攻撃してから叩いてね! すれば滝夜は攻撃されないから♪】

【滝夜…うん】

癒那は何もしないで上がっていくレベルに多少の不満を覚えていた。それ故本で自分を取るスキルのシュミレーションを始めた。沙莉奈とのチャットも同時進行。

【キュア…スキル型決めた？】

【滝夜…自滅型とか…】

キュアからの返答がない。

自滅型とは、自分を中心に五セル分を円で囲んだ範囲に無属性の魔法剣を発動する『デスサークル』

剣士最大の攻撃力を誇るが、育成が大変な上に、攻撃の時に自分の体力、HPを消費するため、余り好まれない型だ。

グループに居ればかなりの戦力だが、育成の大変さと、回復剤にお金がかかるから作るプレイヤーがそもそも少ない。

それに敵からのダメージに加え、反動でくるダメージで、白魔導師のマジックポイント、MPを大量に消費するため好かれない型になってしまう。

【キュア…マジで!？】

【滝夜…うん（笑）なんか少ないって書いてあるからさ、せっかくだから】

【キュア…大変だよ？あんまり好かれていないし…】

癒那は一瞬迷って手を止めた。

（そんなやるわけじゃないし…）

【滝夜…大丈夫だよ（笑）その方がおもしろいし】

【キュア…滝夜がいいならいいけど…まあキャラは作り直せるし】

「そんなに嫌がられてるのか？強そうなのに…」

脇に置いてある本に目をやる。イラストで書かれている『デスサークル』発動中のキャラクターは男女共に中々カッコイイ。男キャラは太い剣、女キャラ細いが長い剣を力の限り振り回すイラスト。

沙莉奈がご飯に呼ばれたらしくレベル上げは三十一で止り街に戻った。楽しんできてしまった。故に少し楽しみに欠けていた。

【キュア…私で良かったらいつでも組むからね！】

【滝夜…うん！】

【キュア…後で私の仲間紹介するから！】

【滝夜…うん、ありがとね】

【キュア…どういたしまして♪また後でね】

その文字が消えると同時にキュアは姿を消した。ログアウトしたのだ。

「でだ…」

癒那は右に出ているスキルバーの一番右の試験管アイコンをクリックした。

中央に剣士のスキル表が出て来た。スキル名と上向きの矢印。

スキルは上限が五のものと十のものがある。

発動しないスキルはキャラを強くするために上限が五。

発動するスキルは上限が十。

とるスキルによって新しいスキルが出て来る。

最初の段階では癒那がとりたい『デスサークル』はまだ出ていない。

「攻撃力アップが五：魔法攻撃力アップも五：誘導が一：」

癒那は間違えないように口に出しながら上向き矢印をクリックしていく。

「ヒーリングが十：ダブルアタックも十：あっ：切れた」

一レベル上がる事に一はいるレベルポイントを振り分けた。三十一はある意味ちょうど良かった。

「これだけあれば、それなりにレベル上げしにいけるのか：」

自滅型は必要スキルがあまりない。あれもこれもではなく、必要なものを最大にというタイプだった。

「私もそろそろご飯かな：」

癒那はちょうど良い所でキーボードの『ESC』を押した。

『ログアウトしますか？』

はい。

画面がまた真っ白になり、IDとパスワードを打ち込むログイン画面になり、その下にある『終了』を押すとゲームのウィンドウが消

えた。

「あんま楽しくないな…」

それもそのはずだ。他力のレベル上げはやる事がない。

「後で一人でやろ…」

癒那はコンピュータの電源をいれたままリビングにおりていた。

この時の癒那はまだ知らなかった、他力のレベル上げも…楽しくなることを。

STAGE 4：少し勉強（前書き）

オンラインゲームプレイ中の方には多少不快な表現があるかもしれません。ご了承ください。

STAGE 4..少し勉強

ご飯から戻った癒那は、貰った本を片手にベッドに腰掛けた。

『冒険前に』

『冒険に出る前に』

『職業紹介』

『育成方法』

『グループ狩り』

『アイテム紹介』

『装備品紹介』

『一言アドバイス集』

目次とにらめっこするが、最初から目を通す事にした。

画面の見方や、チャットの仕方。沙莉奈に教わった事が書き綴ってある。

一つ気になったのは、名前やアイコン、スキルアイコン、チャットウィンドウは自由に動かせる事だ。何かを間違えたのか、途中で画面のスキルアイコンがズレたりしていた事があった。つまりは…自分で掴んで動かしてしまっていたわけだ。

「後でうまい具合に整理しよ…」

次に癒那が目を止めたのは『育成方法』。剣士の自滅型。

デスサークルを取るまでは、どうやらダブルアタックがメイン攻撃になるそうだ。正面からの二打攻撃。

レベルに合わせてのレベルをあげる場所、狩場と呼ばれる場所の行き方やマップが出ている。そのうち飛行船や船にも乗るようだ。

次に見たのは『グループ狩り』。…載っていないかった…。

しかしながらグループには二種類あって、部隊と呼ばれるものと、小隊と呼ばれるもの。

部隊はまず、隊長になる人が団結の証と言うアイテムを所持して、街の中心にある城内部の部隊総取締に話し掛けて任意の部隊名を決めて作る。人数上限は三十人。部隊に入るには隊長から部隊設定画面で、入隊許可をもらった人から勧誘を受けるしかない。

小隊は、部隊に所属してる人、してない人、関わらずに誰とでもコマンド一つですぐ作ることが出来る。チャットウインドウに『小隊設立・名前』で作れる。人数上限は八人。小隊の場合、小隊を作成した小隊長にしか勧誘できない。

どちらの場合も確認画面が出て『入隊』を押す必要がある。

入隊すると会話がしにくくなるのかな？という癒那の疑問はすぐに解消された。

チャットウインドウの書き込み欄の左に空欄がある。そこをクリックして『オープン』『部隊』『小隊』の中から選んでおけば、わざわざ名前を入れなくても常にその状態で会話が出来るそうだ。

「ちゃんと考えてんだ：開発者さんも凄いなあ：」

それでいて毎週されるシステムチェックと新しいシステムやアイテム等の追加。かなり忙しいだらいななんて思う。

そのままアイテムや装備を見てみる。それを落とすモンスターや効果、合成できるものが書かれていた。その中でも、『レア』と呼ばれる珍しいアイテムや装備がいくつかあった。高値取引されていたり、効果が中々の物で装備する喜びもある。

最後の『一言アドバイス集』

そこには部隊や小隊の大切さや、連携プレーの大切さ、ゲームの意外なプレー方法や、人気の敵や、ボス情報などなど。

『自分の全てを任せられる相方が出来たら最高ですね』

『プレイ中に会った人と結婚して、二人で使うスキルを選ぼう！』

「ゲーム中で結婚？これを現実になで持ち込む人があるわけか…うんかなり重症だな…」

癒那は少しの嫌悪感を覚えた。ゲーム中での結婚なんて信じられなかった。ただ：選べるスキルとやらが重要なのかと思うことにした。沙莉奈は多分彼氏とゲーム中で結婚してるだろうから…。

「もうちょっとやってみようかな」

癒那はコンピュータに向かってまたゲームを立ち上げた。

初めて一人で冒険するために。

STAGE 4..少し勉強(後書き)

次回、癒那は価値観を変えるある人に出会います。
いよいよ物語りも本格的にスタートいたします。

お楽しみに！

STAGE 5.. 出会い (前書き)

オンラインゲームプレイヤーの方には多少不快な表現があるかも知れませんがご了承下さい。

会話がチャットの雰囲気を出す為に、『』での続き会話になっております。

なお、名前の酷似においては、作者の意思です。読みにくいかもしれませんがお許し下さい。

STAGE 5.. 出会い

再びのログイン。

プレスト王国中央。

城の前には色々な看板を持ったキャラクターがいた。

本によると、この看板も敵の落とし物で、装備する事により看板に文字を入れる事ができ、最大五種類のアイテムや装備を販売出来るものと言う事だ。

買い方は簡単。看板をクリックすると相手が売ろうとしているアイテム等のイラストと説明書きがウインドウとして出てくる。購入したい物が見付かったら、説明書きの右下に購入数を入力して購入をクリックする。所持金が足りていれば購入が完了して自分のアイテム欄に入る。

人が多いと少しだけ動きが鈍くなる。そこから抜けて町の右側に移動した。

「とりあえず：名前右上、その下にアイコン、真ん中の上にスキル、右はマップ、左下にチャット：OK」

画面のレイアウトを変えて一息。

スキル表を出してスキルバーに当て嵌める。同時にもらった回復剤をF1に。

F2に誘導。F3にダブルアタック。F4にヒーリング。

「こんなもんかな：」

癒那はレベル三十代の狩場の一つを本から選び出した。

『夢の国』

というフィールド。

早速そこに行くための転送屋の所に行く事にした…矢先。

『キュア…やほお♪今どこ？』

と言う緑の文字がチャットバーに現れた。

「個人チャットか…んと…」

『キュア◆街の右側にいるよ』

『キュア…そのまま右突っ切って外に出てみて！』

癒那はキャラクターを右に動かす。

画面が白くなり、砂利道と木々が現れた。山道が平になったような風景。

街を出てすぐ上にある岩。そこにいる四人のキャラクター。

『キュア…きたきた』

『狗世…こんばんはぁようこそ』

キュアの隣にいる弓使いの八頭身の男キャラ。キュアの彼氏。弓道着に身を包んで背に弓と矢を背負ったさらさら茶髪のイケメン系。

狗世^{くぜ}

『ふうちゃん…こんろお初！』

幼女キャラの黒魔導師。ロリキャラでひらひらミニスカートに上半身は黒いマントで覆い隠し、魔女の尖んがり帽子をかぶっている。ふうちゃん。

『枋夜…こんちやあ』

キュアと同じ白魔導師。白いスーツで胸元を開けたホスト風キャラ。りよくや枋夜。

「ちよつと…甲冑なんて私だけじゃん！なにこのおしゃれ…」

自分のキャラと見比べて愕然とした…。

『滝夜…初めまして！よろしく願いします』

『キュア…今これしかいなかった…枋夜さんは違うんだけど、狗久さんとふうちゃんは私の部隊入ってるの、だから滝夜も入らない？』

『滝夜…いいよお』

キュアから部隊入隊申請が来たので、入隊を押した。

自分のキャラにカーソルを当てると名前しか出なかったのが、その下に部隊名【夢猫隊】の文字があった。

『ふうちゃん…オンラインゲーム初めてなんだって？なんでも聞いてね』

ふうちゃんが側に寄って来た。大人と子供の身長差。

『枋夜…オカマの分際で偉そうだなぁおいw』

『ふうちゃん…（。O。；）』

『狗世…いじめるないじめるなw』

『キュア…ふうちゃん中身は男なんだよね♪』

『ふうちゃん…さっそくばらすな!』

『キュア…ええゝ騙されたらかわいそうだし』

『ふうちゃん…騙してなんぼだよ!』

『狗世…ロリコンだけど怖くないから大丈夫だよ滝夜ちゃん』

『滝夜…おもしろいですね』

抜けるに抜けられない雰囲気。

『杓夜…狩り行こうとしてたのか?』

『滝夜…はい、せっかくだから…』

『杓夜…おし、付き合っちゃる。待ってな』

杓夜が街に入って行った。

癒那は画面の外で少し慌てた。とんとん拍子に進む会話にオカマさん。中身が外と同じとは限らない真実…。癒那の中に新たな疑惑、騙せる、が付け加えられた。

『キュア…杓夜さんは面白い人だから楽しんで来てね（^O^）b』
『滝夜…うん♪』

『狗世…あっあいつは中身男だから！オフ会したから確かだよW』

『ふうちゃん…なんか僕悪者？』

『滝夜…ふうちゃんはかわいいと思います！』

『滝夜…会った事あるんですか？』

『キュア…ここにたむろしてる人はほとんど面識あるよ♪狗世さんともオフ会がきっかけだもんね○(≡∇≡)○』

「マジで…」

彼氏が出来たのは聞いていたが、ゲームでできたのは知らなかった…。

マズイ事言ったかもしれないと過去を振り返るが、心当たりがありません。

『狗世…うんうん。ゲーム↓リアルだな』

「リアル…？現実か…はぁ現実をリアルっていうのか」

『枋夜…お待ちせ』

『滝夜…そのままで行くんですか？』

『枋夜…甲冑なんぞ剣士の戦闘だけだぞ？』

『滝夜…え？』

『枋夜…やりながら教えちゃう！とりあえず入れ』

そういうと枋夜がワープを開いた。

『滝夜…行ってきます！』

とりあえず挨拶して入ったが腑に落ちない。強引過ぎると、癒
那は眉間にしわをよせた。

『枋夜…じゃあ借りてくよお』

『キュア…いじめないでよね！』

枋夜がワープにはいるとその光りの球は消える。

真っ白の中から現れたのは、いく予定だった『夢の国』

パステルカラーの床タイル。的はトランプに手足が生えたモン
スターとウサギモンスターとティーポット型モンスター。

ここはティーポット型モンスター以外は、攻撃しない限り襲ってこ
ない。

『枋夜…小隊作るから』

『滝夜…はい』

「うゝなんか嫌な奴…」

枋夜からの小隊申請を了承する。
チャットバーの空白を小隊にかえる。

『枋夜…狩り行きたかったんだろ？』

黄色で出て来る会話。それが小隊だけの会話。

「えっ…？」

『枋夜…困ってるかなって思ってたんだが違ったか？』

「なんでわかったんだろ…？」

癒那は驚きで手が止まってしまった。

『枋夜…操作わかるか？』

『滝夜…わっわかります！』

『滝夜…なんで私が行きたがってるのわかったんですか？』

『枋夜…何となく』

『枋夜…はじめてだったら環境自体い慣れてないだろうし』

『滝夜…ありがとうございます♪』

『枋夜…それにほら、夜、同士だしw』

『滝夜…確かに…』

「面白い人だな」

癒那はこのゲームを始めてから初めて笑った。

『枋夜…ほら敵倒しな』

『枋夜…回復と支援はしてやるから、あとは自力でがんば』

『枋夜…速度増加』

『枋夜…攻撃力増加』

『枋夜…運氣上昇』

『枋夜…回復力上昇』

『枋夜…回避率上昇』

『枋夜…防御力上昇』

全ての魔法が光の輪になって二人を包む。

『枋夜…はい、ファイト』

『滝夜…はい♪』

癒那は滝夜を動かして、F3を押しながら近くにいたハートのランプにダブルアタックを三回連続でかました。あつという間に切れるMP。その後は通常攻撃。

『滝夜…MP切れました…』

『枋夜..最初はんなもんだ』

『滝夜..そうなんですか?』

『枋夜..俺も初めたての時は、そうだったし』

『枋夜..ある程度強い武器持ってそうだけど、後で倉庫あさってな
んかあげよう』

『滝夜..そういえば、預かり場所あるんですよ』

『枋夜..銀行とロッカーな。後で連れてくよ』

そんな会話の間に三匹の敵を倒した。名前の横にあるパーセン
テージが21から30なった。一匹で3上がるようだ。

『枋夜..なんでゲームなんて始めたの?』

『滝夜..キュアにどうしてもって』

『枋夜..キュアさんは結構無理矢理だからな...ご愁傷様w』

『滝夜..いいいえw一週間は無料って言ってたので...暇潰しがてら
ですw』

『枋夜..ほう』

『枋夜..ってか敬語じゃなくていいぞ?』

『滝夜..あっ...えっと...おいくつですか?』

『枋夜…ピチピチの二十三歳』

『滝夜…あっ同じ歳です!』

『枋夜…なら余計敬語いらんだろw』

『滝夜…なるほどw』

「…!?!」

癒那はある事に気が付いた。頭の中でゲーム画面がリアルに動いていることに。

チャットの文字も、言葉みたいに勝手に相手の文字を言葉変えてしまっていた。自分の声ではない音で…。

「こうやってはまるのか…境のない世界に…」

一瞬怖くなった。

『枋夜…あんまりはまらん方がいいぞ』

『枋夜…やってりゃわかるだろうけど』

『滝夜…え?』

『枋夜…ゲームはゲームって事』

『滝夜…枋夜さんはなんでこのゲーム続けてるの?』

『枋夜…ゲームとリアル混同は見てる分には面白いし、ゲームはゲ

ームだしw』

『滝夜…結構怖い人だねw』

『杓夜…何言うか！こんなに優しいのに』

『滝夜…実際どうすれば大丈夫かな？』

『杓夜…俺とお前は今日知り合った。でも現実では赤の他人。つまりはゲーム切ったらゲームは終わりなわけだ』

『杓夜…現実ゲームを持ち込むな。多分明日からのキュアさん見ればわかると思うよ』

『滝夜…そっか…とにかく分ければいいと』

『杓夜…簡単に言えばな（笑）』

『杓夜…因みにどんだけ上がった？』

『滝夜…あっあと？パーセントでレベル32だ』

『杓夜…それあがったら戻ろう』

『滝夜…うん』

程なくして滝夜はレベルが上がり街中にワープで戻って来た。

『滝夜…ありがとう』

『枋夜…どういたしました』

癒那はふと時計を見た。11時半。

「やばっ寝坊する」

普段11時には床につき、6時に起きる癒那にしては珍しい。

『滝夜…ごめん！そろそろ寝ないと朝起きられないかも』

『枋夜…朝早いのかw寝ろ寝ろ』

『滝夜…うん。あつ拾ったアイテム』

『枋夜…いらんw』

『枋夜…あつ寝る前に部隊に挨拶してから落ちろや』

『滝夜…うん』

癒那は設定を部隊に変えて、挨拶をした。

今日は先程あった三人しかいないらしく、三人からのおやすみしかなかった。

『滝夜…あのさ…装備の事とか聞いてないし、また明日教えてもらいたいなとか…』

『枋夜…ええよ、7時には帰ってくると思うから。小隊このままなら帰って来たら呼ぶわ』

『滝夜…うん、よろしく!』

『杓夜…ほなおやすみいゝ良い夢見ろよ』

『滝夜…おやすみなさい♪また明日』

癒那はこの日のゲームを終えた。

その間ずっと連絡がなかった悠斗におやすみメールをして、早々に寝支度を整え歯磨きに降りた。

(杓夜さんっていい人だなあゝ同じ歳だし親近感沸くな)

癒那の中の何かが少し変化した。杓夜に出会った事で、自分に近い考えを持った人も中には居る事を知った。

同時に…杓夜に親近感を覚えていた。杓夜というキャラクターに。

STAGE 6：沙莉奈の現実1（前書き）

オンラインゲームプレイヤーの方には多少不快な表現があるかと思いますが、ご了承ください。

STAGE 6…沙莉奈の現実1

「いらっしゃいませ！」

ユーラシアの営業時間は、朝7時から午後9時まで。

癒那は7時から5時まで働いている。お店の中には珈琲の匂いと、焼きたてのパンの匂い。食欲をそそいつつ、朝の穏やかな空気が流れている。

常連のお客様との日常会話、お昼まではこのゆったりな時間が続くはずだった。

9時。沙莉奈の出勤時間。

少し前に来て、支度を済ましてからホールに出て来る。

「おはよお」

「おはよ」

挨拶を交わした次の瞬間だった…。

「昨日あれからどうなった？ 柊夜さんどうだった？ 私は良いと思うよお？ 顔も普通だし♪」

まくし立てる沙莉奈に癒那は一步後ろに下がる。

（合コンの次の日か！？）

沙莉奈の言葉から『ゲーム』だと想像出来る人はいないである

う。それを笑顔で聞いてくる。悪気どころか、おかしな事を言っているという自覚はかけらもない。

「杓夜さん確かに少し変わってるし、私もよくわかんない事で揉めた事あるけど…でも普通の人だよ？」

何を言われているのか一瞬迷ったが直ぐに疑問を口にした。

「あつあのさ…それは私と杓夜さんを付き合わせたいの？でもおかしくない？昨日少しゲームやったただだよ？」

癒那の質問に沙莉奈は豆鉄砲食らったような顔を見せた。わからないのだ。言葉の意味が。

「くっつけたっていうか…ほら、せっかくの出会いだし…」

溜め息しか出てこない。

「いらっしゃいませっ」

沙莉奈には何も言わず、お客様にお冷やとおしぼりを出して注文をもらってきた。

「ハムトーストとブレンドです」

キッチンに言いながら伝票を書く。

「沙莉奈、私さ彼氏いるじゃん。ゲームはあくまでもゲームだよ。電源を切ったら、他人なんだよ」

杓夜からの受け売りだが、理解しているから、自分の言葉として出て来る。

「そっそれは癒那がまだあんまりやってないからだよ！やったら絶対わかるよ！」

ゲーム依存症。ゲームをやるための現実。そう。世界が逆転している人も現に存在する。沙莉奈もその一人。

沙莉奈にはその自覚がない。『当たり前』の世界なのだ。架空の世界ではなく…現実。

「ねえ…沙莉奈はどうやって狗世さんと付き合う事になったの？」

その問いの後、しばらくお客様が入れ代わりできた為答えを聞く事が出来なかった。

時たま目で追う沙莉奈は、癒那にとっては、少しだけ変わって見えた。何かを演じているような…それでいてそれが普通のような。

しばらくしてやっと一段落した。お昼前のつかの間の休み。

「さっきの答えだけど、最初は普通に狩りしてて、色んな話してるうちに、好きになっちゃったの」

沙莉奈はキッチンから上がって来たソーサーを拭きながら照れ臭そうに話し始める。

「東京と京都で離れてるけど…それでも好きになっちゃって私から告白した」

癒那には信じがたい話だった。ネット恋愛は確かに存在するが…。

「その時点で相手の顔は？どれくらい付き合って何回あった？」

「写真送りあったから知ってるし、電話でも話したよ！付き合って半年だけど三回会った！お泊りだよ♪」

速答された質問。

写真でみた…その写真を素直に信じられるのはすごいなと癒那は関心した。二ヶ月に一辺。社会人なら妥当なのか？

「でもさ…ネットはいくらでも作る事出来るじゃん？メールも電話も。三回しかあった事なければなおさら…。沙莉奈の彼氏の狗世さんは、本当のありのままの狗世さん？」

この時既に癒那の中には『好奇心』が渦巻いていた。

自分にはない感覚と価値観。沙莉奈はそれを体験してる。癒那の問いなど沙莉奈にとっては不自然なものなのだ。

ネットで…顔の見えない、本心の読めないオンラインゲームで、相手の真意なんてわかるのか。相手を信じる事などできるのか…。

「癒那はまだ始めたばかりだからわからないだけだよ…ゲームはゲームって一つの現実世界なんだよ？自分を表現したり、ありのままでいたり、自由なの」

癒那にとってのツツコミ所を見付けた。『自分を表現したり』つまりは…作り上げた人格者もいるわけだ。

そんな話をしているうちに、徐々に通が騒がしくなって来た。時刻は十一時半。ここからが昼のピークだ。

「続きは後でね♪」

「うん♪頑張ろうね！」

癒那の提案で会話は一段落した。

迎え撃つ敵は：昼のお客様だ。一時半までの二時間に五十人位はさばく、高回転の店へと変貌する。

お客様の目当ては『ビーフシチュー』。限定三十食！パンかライスにサラダにドリンクで七百円！それなりに安くて売り。

しばらく二人にとって休む間もない時間が始まった。

STAGE 6：沙莉奈の現実1（後書き）

昼のピークを乗り越えて、沙莉奈のお話は続きます。

STAGE 7 .. 沙莉奈の現実2 (前書き)

オンラインゲームプレイヤーの方には多少不快な表現がございます。
ご了承ください。

STAGE 7…沙莉奈の現実2

1時40分。

ようやく一段落ついたが、まだまだ終わりではない。

キッチンから渡された洗い立てのソーサやスプーン、フォークなとホールから出す物は、拭かなければならない。

手を動かしつつ、やっと時間が出来た二人は会話の続きを始めた。

「癒那には不思議な世界でしょ？でもね……初めて女として接してくれたんだよ、狗世さんは」

苦笑いしながらソーサーを拭く沙莉奈。

沙莉奈は百五十センチちょっとのショートカットの女の子。顔はいたって普通。

男の子のスタッフが言うには『下の上だな：あからさまにオタクじゃん』とのことだが、癒那から見れば、ちよつと童顔な普通の女の子。そのスタッフに『万年合コン男の癖に偉そうに』と癒那は言い放ったくらいだ。

因みに癒那には『上の下だな：一見近付きにくい雰囲気があるからナンパはねえな』という評価がつけられていた。

もちろん癒那は『こっちから願い下げだ！』と言う返事をした。そんな癒那はストレートの肩までの茶色い髪に、身長は百七十まで後少し、といった細身のどちらかというと綺麗に分類されるタイプ。が……女っぽさにかけてるのが残念な所。

そんな二人だが、凸凹コンビだが女二人不釣り合いなわけではない。逆に沙莉奈の方がオシャレなくらいだし、癒那にとっては何故現実で探さなかったのか不思議だった。

「不思議っていうか……なんだろう……何で狗世さんが本気だっと思ったの？相手の真意なんて、こうして会っててもわかり切ることは難しいじゃん？」

その問いに沙莉奈は迷い無く答えた。

「ちゃんと私の全てを話しても……逃げずに受け入れてくれたの。それで付き合ってたって言ったら『俺もそう思ってた。俺が幸せにする』って言うてくれたの……ゲームでね♪それで、まだゲームでしか出来ないけどってゲームで結婚したんだよ。自然に信じられたよ」

癒那に笑顔を見せてから、カウンターの向かい、二人が背にしていた方の棚にソーサーを片付ける。癒那も同時に終わったスプーン等を、プラスチックの小分け箱に一人用と二人用を入れ分けていった。

「ゲームでチャットしてると……普通に話してるのと同じみたいになってくるんだよね。それで携帯交換したら実際話して声がわかるから……余計にね。チャットと電話……当たり前みたいに癒那とこうやって話してるのとかわからなくなるの」

癒那は固まった。

その言葉に思い当たる節があった。昨日杓夜とチャットしていた時だ。まるで小説を読む時に、頭の中で人物を作り上げ、ドラマ化するように、杓夜は頭の中で存在していた。それも小説と違って、会話の相手は自分。

しかし癒那は一つの嘘を見つけた。昨日バイト上がりに沙莉奈は、彼氏は前のバイト先の人だと言った……。昨日ゲーム中、そして今日はゲームから始まったという……。

（ゲーム出会ったのが本当だろうな……。私引きずり込む為に昨日嘘付いたのか？……。考えすぎか）

自分の中に出来た疑問を一先ず受け流した。

「癒那もやってればわかると思うよ……。すごく良い仲間に会えるし、たまり場来れば誰かしら居ると思うからさ♪杓夜さんは違うからいないかもだけど……。」

「ああ……。とりあえず今日帰ったらまた連れてってくれるって」

「へえ♪そっか♪暇になったらおいでね、皆に紹介するし、なんかもらえるかもしれないから」

笑顔が一瞬曇った気がした。沙莉奈と杓夜の間にはあるいざこざが過去にあったらしい。

「まあ適当にやるよ…一週間だしさ」

「うーん……。続ければ良いのに、楽しかったらさ♪明日から休みだしやりまくれるよ!」

土日が休みの二人。

癒那は「土曜はデートだから」と答えた。

その後二人は同時に一時間の休憩をとったが、ずっと沙莉奈がゲームについて話したままだった。戦い方や、誘い方、自分のレベル上下十以内の小隊だと経験値を均等に分ける事が出来る事、ボスを倒す大変さ、クエストと言う依頼完了の仕事。沙莉奈の思い出話し、そして恋愛話し。ゲーム中での嫉妬や邪魔や…まだ癒那にはわからない世界の話であり、見た事ないキャラの話し。

それは休憩時間を越し、バイト上がるまで続いた。癒那が開放されたのは、帰り道だった。

(ほんっとゲーム好きなんだなあ……)

歩きながらふと思った。

(悠斗は本当に嫌じゃないのかな?)

癒那はバイト上がりの日課のメールを打った。

『お先にお疲れ様♪』

今日はゲーム誘って来たバイトの子のゲーム体験談で大変だった

(*^□^*)

明日はどうしようか?どこか行く?まったりすごす?』

そんなメールを作りながら癒那は帰路についた。

STAGE 8：不思議な感覚（前書き）

オンラインゲームプレイヤーの方には多少不快な表現があるかもしれません。ご了承下さい。

STAGE 8..不思議な感覚

家に帰った癒那は、リビングの母に挨拶をしてから真っ先に自室のコンピュータに電源を入れた。

服を着替えながらゲームを起動させていく。ゲームが起動すると慌てた様子でイスに座った。

IDとパスワード入力がもどかしい。そんな思いが湧いた。

『プレスト王国 イン』

ログインと同時に開く部隊と小隊の接続状況が書いてあるウィンドウ。

通常はシフトとBで開閉するものだが、ログイン時には必ず右下に現れる。

「部隊は・・・・・・誰も居ない。小隊は・・・・・・」

癒那は小隊に杓夜の名前を見つけた。もう杓夜はこの世界に居る。

『滝夜..ただいま帰りました!!』

黄色い小隊チャットで表示される文字。

『杓夜..おおおかえりなさいお嬢様w』

『滝夜..なっなに? 執事喫茶? w』

『杓夜..のりだよのり。それよか城前に居るからみつけてみい』
その文字に癒那は不思議な感覚を覚えた。

ゲームの中とはいえ、まだ会って2日目。しかも今日はこれが初の会話だ。

この世界には、ゲームの中には、月日などないのだろうかという感覚。

癒那は滝夜を城の前へと導いていく。

「えっと………白いスーツ白いスーツ。以外と多いなあ」

城の前には杓夜と同じ様な姿をした人達が結構な数存在した。

髪型や、背格好に多少の違いはあるにしても、同じ装備品だと一瞬で見分けるのは難しい。

それでも癒那は杓夜の姿を見つけた。

『滝夜…いたw』

近く来るとキャラの頭上にも文字が出てくる為、癒那は滝夜を杓夜の隣に置いた。

『杓夜…ほお良くわかったなあw』

(自分でも不思議だよ………)

『滝夜…へへへ』

癒那はウォーリーを探せを思い出していた。これも似たようなものだと。

『杓夜…今レベル32だっけ?』

『滝夜…うん』

『枋夜…何型？』

『滝夜…自滅型………』

『枋夜…珍しい奴だなあ、最初から自滅かよw』

『枋夜…で？デスサークルもってんの？』

『滝夜…今1だな………後9でそろっ』

『枋夜…お前もしかして、その他の取ってからメイン取ってるのか？』

癒那は良くわからなかった。ただ上から順にスキルを取って行っただけだ。

それで出てきたデスサークルを最後に取りるのは、癒那にとっては当たり前だった。

『滝夜…だって出てこなかったもん』

『枋夜…お前馬鹿だなあ。。。他のスキルフルで取らなくても』

『枋夜…途中まで取っとけば出てくるのに』

「うそっ………何それ」

癒那は思わず左手で額を押さえてしまった。
メインの技さえあれば、狩場もまた広がるだろうに。

『枋夜…ちなみに今日から一週間経験値2倍キャンペーン実施中』

『枋夜…ってわけで、後9頑張れ!』

『枋夜…とつととあげないと一週間で遊びきれないぞ』

その文字に何故か一瞬心が揺らぐ。

『滝夜…えっと………どうしたらいいの?』

『枋夜…とりあえず後9頑張って、レベル40だろ………そこから先は早いよ』

『滝夜…やっぱリデスサークルが先だったかな?』

『枋夜…いまさら言っても遅い』

『枋夜…ほら、ついで』

城の前を左に進み、人込みを抜けた。

『枋夜…そーいや装備は?』

『滝夜…最初キュアにもらったまま……』

『枋夜…おいおい………レベルに合わせて装備も変えろよな』

『枋夜…金は?』

『滝夜…一千万ある』

『杓夜…買いに行くぞ』

癒那、もとい滝夜は杓夜に連れられて装備屋を回り、今のレベルに合ったものと、40代に合ったものを買った。

『杓夜…ロッカーはこっち』

城の裏手にある木造のロッカーらしきもの。まるで街中にある公共本棚に見えた。

ロッカーの利用は、ただロッカーをクリックすればウィンドウでロッカー中と自分の所持アイテムが出るようになっていた。不要なものを全て預けて、癒那は滝夜を左で待つ杓夜の元へ向けた。

途中で何人かの部隊メンバーがログインしたので、挨拶だけしかわした。杓夜と一緒にだという説明は沙莉奈がしてくれたので、後は操作に慣れていないということで集中させてもらうことにした。

『杓夜…30代の装備になると、少しはスマートになるなw』

滝夜の装備はゴツゴツの物から少しスマートになった。とはいえ、30代の装備にも色々あるなかで、今滝夜が身につけているのは杓夜の見立てだった。頭には黒いバンダナ。

胴の甲冑は胸元を隠すだけの小さいものになり、へそ出しになった。下半身は黒いズボンにスカート状に少し開きのある鉄板がついていた。

靴は銀色。

マントは変わらず黒の長い物。

そして武器である剣は……

『枋夜…何となく作ったら出来たからプレゼント』

枋夜は昨夜あれから滝夜用の武器を作っていたのだ。自滅型だという事も、キュアから先に聞いていた。

自滅型最強の武器。『デスクロスソード』

長剣といくつかの宝石アイテムを合わせたもの。お金もそれなりにかかるが、お金よりも確率の問題だった。20回中一回成功。それくらい低いのだ。

それを偶然にも一度で成功させた枋夜はかなりの運を持ち合わせていた。

「あれ……？名前が入ってる」

デスクロスソードを装備する時操作ミスで、説明が書いてあるウィンドウを出してしまった。そこには

『滝夜のデスクロスソード。枋夜からの贈り物。デスサークルの威力を最大限に引き出す唯一の武器』

と書かれていた。

『滝夜…これ名前はいつてるよ!？』

『枋夜…せっかくできたからな』

装備品作成に成功すると、プレゼントにするかどうか問われる。そこで相手の名前を入力すればプレゼント用に名前が入る。名前を入れると名前が入ってるどちらか以外は装備出来ないようになる。

『滝夜…こんなにすごい武器…私専用でいいの？売れば高いんでしょ?』

「なんでこの人こんなこと…」

癒那は相手の真意を探った。

『杓夜…せっかくやるんだったら、一週間だけだとしても楽しませてやろうと思っただけやw』

『杓夜…あっそれともあれか？』

杓夜からのチャットが止まる。

『滝夜…あれって？』

「なんだろ……」

『杓夜…お前が気に入ったから』

「……！？」

『杓夜…とか言った方がよかったか？』

画面を食い入るように見ていた癒那は、妙な脱力感を感じてしまった。

期待していたわけでも、願っていたわけでもない、でも……多分『体感してみたい』という感情が少しずつ芽生えているような感じが癒那を襲った。

『滝夜…どうせ本気じゃない癖にw』

『杓夜…まあ興味が無かったら昨日で終りだったのは確かだなb』

『滝夜…興味持たすような事した？』

『朧夜…さあね？』

『朧夜…ほら、せっかくだし狩り行こうぜ』

『滝夜…うん』

チャットでは相手の真意はわからない……顔が見えないのは把握できないことが多過ぎる。
癒那は戸惑った。

ゲームはゲームなら……現実とはまったく別なら……それがわかってる相手なら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599c/>

EARTH FANTASY ONLINE

2010年10月11日15時39分発行